

## 目次

はじめに	1
第一章 昭和平成期方言相と日本語史「近古」	3
第二章 昭和平成期方言相と日本語史「近世」	8
□ 言語史理論（一所見）	10
第三章 日本語史の中の語のアクセント史	
— 方言観から出発して —	12
前 言	12
序 節 史的アクセントの文献的研究でのアクセント史料	13
第一節 <small>観智院本</small> 類聚名義抄の声点	16
第二節 <small>前田纂二冊本</small> 色葉字類抄の声点	20
結 語	24
余 節	25
末 節	27
第四章 日本語史点描——方言観から出発して——	29
第一節 音 韻	29
一 中舌母韻〔i〕〔ü〕	29
二 鼻母音	39
三 ガ行子音〔ŋ〕	48
四 ラ行子音〔ɾ〕	50
1 ラ行子音〔ɾ〕の添加	51
2 九州地方のばあい	52
3 中国地方	53
4 四国地方	55

5	近畿地方	55
6	中部地方	56
7	関東地方	57
8	奥羽地方	57
五	「クワ・グワ」(kwa)(gwa)と「シェ・ジェ」(je)(ze)	58
六	(P)(F)音(ハ行子音)	64
七	タ行音「ヂ」(dʒi)「ヅ」(dzu)	68
八	連母音同化	70
第二節	文法	72
一	二段活用	72
二	活用変移——「動詞一般活用の四段(五段)活用化」など	74
	〔用言〕	77
三	イキテ(行きて)	77
四	イタテ類	79
五	カキュリ(書き居り)	81
六	「～ロ」命令法	82
七	ヨカことば	84
	〔助動詞〕	85
八	「行ケタ」類	85
九	「～レル・ラレル」敬語法の中のひとくさり	86
十	「～ナレド」「タレド」,「～ドン」,「～ド」など	87
十一	「～ナラバ・～タラバ(ダラバ)」「～タレバ・ ～ナレバ」など	95
十二	ベーベーことば	100
十三	「召す」からの「～メセ」など	103
十四	n.ことば	104
十五	「～うず」	105

十六	「～ず」〈打消〉	113
	〔接頭辞〕	117
十七	「お～」	117
	〔助詞〕	118
十八	主部助詞「ノ・ガ」	118
十九	主部助詞「イ」	121
二十	「～ダリ・ダイ」係助詞	122
二十一	「こそ～けれ」表現法 および派生諸事象	123
	後説	131
第三節	語詞	132
一	名詞「コ」	132
二	名詞「フクシ」	134
三	名詞「ク」	135
四	名詞「キ」	136
五	名詞「レー」	138
六	名詞「トイモ」「カライモ」など	139
七	名詞「ルイ」	141
八	動詞「アイブ」ほか(歩む)	142
九	動詞さまざま	144
一	ワク(分く)	144
二	ツム(積む)	144
三	ツドウ(集 <sup>ふ</sup> )	145
四	トロミ〔下中型〕(満潮での海水不動と見えるしばし)〈名詞〉	145
十	形容詞二・三	145
一	ケナルイ	145
二	ヨダケナー	146
三	ラッシモナー	146

十一 副詞	147
第五章 日本語史展開〈発達〉上での歴史的法則	148
序説 歴史的法則の追究	148
歴史的法則	148
第一節 複合	148
○ 前がき	148
一 名詞	149
二 副詞	151
三 形容詞	151
四 動詞	152
1 「ゴザル」類に関して	154
2 「致す」	157
3 「する」	158
4 「見る」	159
5 「上げる」	159
6 「居る」	160
7 「ある」	161
8 「言う」	161
9 「居る」	163
10 「やる」	167
11 「～てしまう(しまった)」の意のもの	169
五 助動詞	172
六 助詞	178
1 「～は」	178
2 「～を」	178
3 「～ば」	178

4 「～から」	179
5 「サカライ」	180
つけそえ	181
七 複合因子としての「て」の重大性	182
第二節 省略	182
○ はじめに	182
一 下略	184
二 上略	188
三 中略	190
1 名詞のばあい	190
2 動詞のばあい	193
3 動詞+助動詞のばあい	194
4 形容詞のばあい	196
5 助詞のばあい	196
6 「音」略	197
第三節 転訛	198
○ はじめに	198
一 名詞	198
二 動詞	202
三 動詞関係のもの	204
四 形容詞	206
五 形容動詞・連体詞	207
六 助動詞	207
七 助詞	209
八 副詞	210
九 文表現上のもの	211
十 文末詞	211

□ むすび	212
第四節 創成	213
○ はじめに	213
一 名詞	214
二 動詞	214
三 助動詞	217
四 形容詞	218
五 副詞	218
六 間投詞～間投句	219
七 文末詞	220
八 文表現(文形成)	221
第五章への付説 〈日本語史溯及〉	223
第六章 日本語の将来	228
第一節 文法〈表現法〉に関して	228
□ 付言	233
第二節 方言について	233
結語	235
後語	236
恩借引用文献一覧	238

## はじめに

「国語史と方言」または「方言と国語史」は、わが国での日本語(国語)研究史で言うなら、早期からの注意テーマであった。‘古語は方言に残る。’と、早くから言われてきたのも、いわば、国語史と方言とをにらみ合わせる見かたによくつらなるものであった。

わが国のいわゆる国語学は、今日にいたっても、大約、史的研究を主流としている。国語史関係の発表物が多いであろう。現下の、日本語関係の研究発表会にあっても、多く、史的研究に関する題目が見いだされる。加えてそこに、方言関係のものが位置づけられている。

要するに、日本語に関するこれまでの研究史上では、方言研究が、国語史研究にもとづけられてきた。

私もまた、そんな大勢の中の一人にほかならなかった。昭和四十年代以降、「方言と国語史」に関して、しばしば、ものを書きとめてきている。——未発表の論考がすくなくない。(この間、畏友からも、「方言の学問と国語史研究とが、どのような理論でむすばれるべきものか。」というような問いを受けたりもしている。一方、新鋭の国語史研究者から、「歴史的現実としての現代語諸方言に目を向けずして、国語史学は成り立たない。」というようなことばもいただいている。)

ここには、旧稿の一つ、「方言と国語史～方言学的見地からの日本語史考究～」のあることを記しておく。

以下、略す。

昭和9) ※ ※ ※

自称の代り

今、『続<sup>昭和</sup>平成 日本語方言の総合的研究』全七巻の完結巻を公表することができ、私は、感謝と欣幸の思いを深くする。

主格助詞としては、「近」に、

室町末期には、「が」を普通に用ゐ、特に主格に立つ人を尊敬する場合とか上品に言ふ場合とかに「の」を用ゐたのであらう。

とある。「薩」では、

○センセイ<sup>ア</sup> ゴザイ<sup>タ</sup>。

先生がおいでになった。

など、「ノ」敬意表現法が広くよくおこなわれてきた。

動詞活用に関して、「近」には、

然し九州地方ではこれらを「心ゆる」「教ゆる」「植ゆる」とヤ行下二段に活用させてゐる。かゝる九州方言こそ室町時代の言ひ方を伝へたものである。

とある。薩隅方面は、九州内でも手がたく二段活用を保有してきた。

「近」に、「お尋ねあれ」「お待ちやれ」など、「お……ある」敬意表現法のよくおこなわれたことが説かれている。——「お待チャレ」ともあった。「お……ヤレ」ともなった。「ヤレ」・「ヤル」がよくおこなわれたようである。（「オ」ぬきにも。）「薩」では、これらが今もさかんにおこなわれている。ことに「オ」ぬきの「ヤレ」・「ヤル」が、

○オアガイヤッタモンセ。

お上がりなさいませ。

○ハヨ イッキヤイ ヲー。

早くお行きなさいな。

などとある。「ヤス」「ヤンス」もよくおこなわれている。「薩」での「お……ある」表現法の盛行を思わせる格別のものは、当地方での、

○マ<sup>タ</sup> オサイチャッタモンセ。

またお越しになってくださいませ。

である。——「お差し出であつて賜わり申せ」との言いかたがしてある。ここまでの丁寧な言いかたがされるにあたって、「お……ある」表現法が心敦くと

りたてられている。私は、しばしば薩隅地方を訪ね、諸民家に参上するたび、きまったように、主婦さんがたから、この送辞を忝うしている。全九州中でも、ここに特立した敬意表現法がある。

「近」では、「おはす」からの「わす」について、

「わす」には鎌倉時代に「おはす」の上略によつて出来た語であるが、とある。「薩」でも「ワス」がおこなわれていて、「ワセラッタ」（ワセられた）などとある。

「近」では、「ござる」に関しては、

「御座ある」「ござる」は貴人のおはしますことをいふのから転じて、「ある」の丁寧語に用ゐ、更に助詞「に」「にて」「で」を伴つたりして、丁寧の助動詞となり、室町末期には盛に用ゐられた。

とある。「薩」では、「ござる」の關係の「ゴアス」がじつによくおこなわれている。「アイガト ゴアス。」「アイガト ゴアシタ。」「（ありがとうございますくございました。）」など。「ござる」ことばが「ゴイ」ともある。「ゲン シタト ゴイ カヨー。」「（どうしたんでござんすか？）」など。

「近」に、

「御出である」「おぢやる」「お出である」も亦「お入りある」と同じ意義用法を以て用ゐられ、「おぢやる」の語形をとるやうになつた。抄物にはまだ新語形を見ない。

とある。「薩」では、（「オ……アル」表現法のことはすでに述べた。）「オチャル」のおこなわれることがじつにさかんである。その盛行のさきは、拙著『方言敬語法の研究』中の「第2図 『オジャル』尊敬法動詞の分布図」（p. 669）にも明らかである。種子島では、

○オマヤー ドケー オチャリモース カイ。

あなたはどこへおいでなさいませか？

などとある。「マ<sup>タ</sup> オチャッタモンセ。」「マ<sup>タ</sup> オチャッタモンセ。」（またいらしてください。）は、薩隅方言下全般で、ふつうによく聞かれるものであろ